

令和5年 お正月あれこれ

上原 昇 (2組)

▲今年（令和5年）のお正月もコロナとともに始まった。

コロナ前までは毎年、三が日のうちに出かけていた大宮氷川神社への初詣は人混みが怖いので、近くのお寺に出かけることにした。

元旦の午前中は年賀状が届くので、それを見るのが楽しみだ。

ただ我が家では、喪中ということで、今年の年賀状のやりとりは止めている。

ところが、ポストを開けて見るとかなりの数の年賀状が来ている。

その中には、昨年11月こちらから出した喪中連絡を忘れてしまったと思われる人もいる。

近年受け取る年賀状に「今年を最後にします」という人が増えてきた。賀状終いとでも言うのだろうが、ちょうど我々の年代（75歳）くらいから多くなるようだ。

仕方がないこととは思いますが、何となく寂しい気もしている。

▲家の近くに大きなスーパーが2社あって、家内は買い物をする際、その日のチラシを見たりして使い分けているようだ。この正月、その2社が対照的な営業をしていたのが興味深かった。L社（としておきます）の正月1, 2, 3日休みに対して、I社（としておきます）は三が日営業していた。

昔はともかく、正月三が日休みのスーパーというのも珍しいのでは。

どちらが良いのかは立場に寄って見方が違うと思うが、日ごろからL社の社員（パートさん）の方が生き生きと働いているように見える。

人手不足が話題になる中、小売り業界にも働き方改革の波が押し寄せているようだ。

▲昭和4, 50年頃のお正月には、映画館に正月映画を観に行くことが多かった。

何と言っても人気があったのは松竹の「男はつらいよ」シリーズだった。

この映画は昭和44年（1969）に始まり、平成7年（1995）まで26年間、48本続いたお化けのような長寿シリーズだ。私もシリーズ前半（寅さんが元気だった頃）の作品は、お正月とお盆の時期に殆んど観ている。

ただ、昭和48年の正月作品でシリーズ10作目「寅次郎夢枕」だけは観ていなかった。

この正月、神田神保町の名画座で同作が上映されると聞いて、1月4日に出かけた。

当日、99席の小ホールは、私のような年配者で満席状態である。

▲同作の主なロケ地は、長野県塩尻市の奈良井宿と中央線日出塩駅と信州に縁が深い。

マドンナ役の八千草薫（当時41歳）が華を添え、大いに楽しませてくれた。

なお、同シリーズ18作目の「寅次郎純情詩集（昭和52年正月公開）」は、ロケ地が上田

(特に別所温泉)で、ご覧になった人も多いことと思う。

監督の山田洋次は昭和の懐かしい風景として信州の景観を好んでいたようで、同シリーズ中4作品が木曽路でのロケを行っているとのこと。

塩尻と上田は地理的に大分離れているが、画面で見る風景はやはり郷愁を呼び起こしてくれる。「昭和は(ますます)遠くなりけり」である。

映画「男はつらいよ 寅次郎夢枕」ポスター



(2023.1.5 記)

以上